

現代アラビア語の動詞“完了形”とその複合形の機能の違いについて

近藤智子

1. 研究の目的

アラビア語には完了相・過去時制を表す“完了形(略号P)”に対し、その前に補助動詞や副詞を前置した複合形 *kāna P*, *qad P*, *kāna qad P*がある。これら4つの形式は、過去時制表示(Pと*qad P*についてはさらに現在完了時制表示)において一見重複している。また*qad P*と*kāna qad P*においては、付帯状況描写という機能上の重複がみられる。これらの形式間の違いは曖昧で、複合形はある時制や機能を形式的に明示すると考えられてきたにすぎない。本稿では*kāna*や*qad*の機能、及びこれらの形式がテキストで現れる位置をもとに、これらの形式間の違いや複合形による意味・機能の明示の条件を考察する。また、*qad P*と*kāna P*は出現環境にめだつた偏りがあるが、その理由を頻出/稀出環境の構造と機能から検討し、形式の意味・機能の分析に利用する。最終的に、4形式間の機能の対立が、文ではなくテキストで明らかであり、複合形を含めた動詞の体系が、本質的にはテキスト機能¹⁾に関わるものであることを示す。

本稿で対象とするのは、“現代(標準)アラビア語²⁾”または“書き言葉”と呼ばれているものだが、テレビ・ラジオ放送や演説など公的な場面で話されたり、異なる方言(口語)を用いる人々が会話をする場合に用いられる。従ってデータは主に本から得たが、対比的な分析に適した例が無い場合は母語話者によつた³⁾。母語話者による適格/不適格の判断の結果は、集めたデータの統計的事実と合致したが、その中には時間副詞節や関係節への*qad P*の稀出など、これまでほとんど記述・検討されていない現象が見られた。これらは既に解明されている諸現象をくみあわせて本稿で説明しているが、別々に記述されてきた現象を新たな側面から関連づけることで、より有機的な文法体系の記述が可能である。

2. 現代アラビア語の動詞体系

形の上からみると、動詞体系は基本形と基本形に補助動詞や副詞をくみあわせた複合形に分けることができる。

基本形には“完了形(略号P)”と“未完了形(略号IP)”の2つがある。基本形が表す意味は相と時制がくみあわさつたもので、いわゆる古典アラビア語では、Pは「完了相・相対的過去時制」、IPはそれ以外の「完了相・相対的非過去時制」または「未完了相・過去/非過去時制」を表す(Comrie 1976: 80)。歴史的にみると、基本形の表す意味は相が本質的であるが、現代では“書き言葉”と“口語”の両方において、動詞体系が相から時制の体系に移行している(Holes 1994: 177)。現代アラビア語の

時制は主節で絶対時制(Comrie 1985: 63 fn.7)であり、筆者の分析では、Pは「完了相・過去時制」、IPは「未完了相・現在時制」または「完了相・未来的用法の現在時制⁴⁾」を表す。またPは、現在時を示す時間副詞等の文脈によって「現在完了」の解釈も可能であるが、これは完了相と完了(perfect)の構造が類似しているためである⁵⁾。

(1) kataba risâla al-'âna.

書く3単P 手紙を 今 (彼はたった今手紙を書いた。)

複合形に用いられる補助動詞はkâna(P)/yakûnu(IP) "lit. to exist"で、基本形PまたはIPの前に置かれ、人称・性・数により変化する(本稿例文では補と表示)。kânaは過去を示し、yakûnuは副詞sawfa/sa-とくみあわさって未来を示す。

複合形に用いられる副詞はsawfa/sa-とqadである。sawfa "lit. in the end"はIPの前に置かれ未来を示す。sa-はsawfaが短縮されたもので動詞に接頭して表記される。qadはPの前に置かれて「現在完了」や「強調」を表し、IPの前に置かれた場合は「蓋然性(推量)」を表す。

複合形の形成は補助動詞と副詞を繰り返して用いる。例えば、[副詞+動詞]のqad Pに対し[補助動詞+副詞+動詞]のkâna qad Pがあり、さらに[副詞+補助動詞+副詞+動詞]のsa-yakûnu qad Pがある。単にこれらの要素を繰り返すのではなく、その順序に規則性があるが、これは§7で検討する。基本形と複合形の体系は付録を参照されたい。

ところで、複合形について二点、本稿の立場を説明しておく。まず、本稿では副詞をくみあわせた形式を時制形として扱っている。時間副詞の役割が時間指示上重要であるとはいえ、副詞を時制形の一部とみなすことには疑義があるかもしれない。しかし、時制を表す方法は通言語的にみると動詞に限らないし、sawfa/sa-やqadは次の点から他の時間副詞と明確に区別され、しかも動詞と緊密な結びつきをもつので、これらを時制形の一部として扱う。

まず形態・統語的な根拠として、一般の時間副詞の位置は、主題になる場合を除き動詞より後になるのが普通である。一方sawfa/sa-やqadは、常に動詞の直前に位置する⁶⁾。またsawfaは短縮されてsa-となり、表記上動詞の接頭辞(拘束形態素)となる。sawfaやqadも、単独では現れず位置が固定されている点で、拘束形態素と同じである。

次に意味的な根拠としては、一般の時間副詞(例 al-'âna "今")と異なり、固有の指示的な意味(sawfa→"最終", qad→"たった今, 駁")を表すのではなく、より一般的な意味(sawfa→未来, qad→完了)を表す。しかもこれらの意味は動詞から離れ単独では現れない。未来時制の完了相(正しくはsa-yakûnu P)に*sa-Pが用いられないのは、saだけでは未来時制を表せないからである。sa-は動詞yakûnuと結びついて初めて

未来時制を表す。またqadの複合により表される「現在完了」や「強調/蓋然性」はPとは異なる時制と法性を表しているが、これは動詞の文法範疇(時制・相・法性)のうちの2つである。従って、qadが動詞の文法範疇に関与する度合いは強い⁷⁾。

補助動詞を付加した場合の複合形では、主語が、補助動詞と基本形(または副詞+基本形)の間に位置する(例 kâna S qad P)。ひとまとまりとして扱うべき時制形が形の上で主語により分断されるため、補助動詞を伴う形式を複合時制形とみなさない立場がある(Cantarino 1974 1: 71)。しかし、本稿ではこの形式も複合形として扱う。その根拠は、この形式は複文から派生したため主語が間に位置するが、補助動詞と基本形との意味的な結びつきが強く、ひとまとまりとみなせるためである。

複文 [P₁ S₁ wa qad P₂ S₂] (X₁:主節要素, S:主語, wa:等位接続詞, X₂:従属節要素)において、P₁→補助動詞kâna, S₁=S₂, wa→φによって複合形 [kâna S qad P] が形成される。主語が同一になり接続詞が消去されることで主節と従属節の結びつきが強くなる。その結果、複文の主節を否定した場合、否定の範囲は主節 [P₁ S₁] または複文全体 [P₁ S₁ wa qad P₂ S₂] に及ぶが、複合形の否定は複合形全体 [kâna S qad P] に及ぶ。また主語位置は固定的ではなく、補助動詞に先行したり基本形の後に位置したりする場合もあり、複合形構成素の形式上の不連続は、機能上これを複合形として扱うことを妨げない。

本稿では過去を示す4つの完了相形式P, qad P, kâna P, kâna qad Pを対象に、時間指示・機能上の重複と出現環境の偏りをもとに検討する。§ 3ではP, kâna P, kâna qad Pの違いを検討し、§ 4ではqad Pとkâna qad Pの機能の違いをみる。次の§ 5と6では、Pとqad Pをそれぞれ文レベルとテキストレベルで検討する。§ 7は複合形形成の規則を扱う。

3. P, kâna P, kâna qad Pの意味・機能の違い

時制と時制形が1対1に対応しないのは通言語的にみられる現象だが、アラビア語でも形式間で時間指示上の重複がある。本稿では、形の違いは意味の違いを示すという立場から、複合形の意味は構成的(compositional)であると仮定して検討をすすめていく。また、関係節は相対時制の場合があるので主節と別に検討する。

3. 1. 主節のP, kâna P, kâna qad P

次の例にみるように、Pのほかkâna P(例(2)), kâna qad P(例(3))も過去時制を表していると解釈でき、これらの違いは一見曖昧である。

(2) kuntu axrajtu háðâ al-kitâb wa- anâ xâ' if...

補1単P 出版する1単P これを 定 一本を そして 私は 恐れて

(わたしはこの本を恐る恐る出版した・・・, H:序文)

(3) kānat mā'ida faTūr qad wuDi?at Gayr ba?id ?an al-nār.

補3単女P テーブルが 朝食の 置く3単女P受 ~ない 遠い ~から 定- 火

(朝食のテーブルは火から遠くないところに置かれていた。QM: 22)

本稿のデータをみると、kāna Pは主節以外でも全般的に使用頻度が低いが、用いられている例は1・2人称の場合が多く(例(2))、文脈から『過去』⁸⁾より古い『前過去』に対応する時制を表していることがわかる。

(2') al-muqaddima al-θāniya kuntu axrajtu hāḏā al-kitāb wa- anā xā'if...

定- 序文 定- 第2 補1単P 出版する1単P これを 定- 一本を そして 私は 恐れて

(第二版序文 私はこの本を(第一版を出した時) 恐る恐る出版した。... H: 序文)

(2')では、第二版出版時を基準にそれより前の第一版出版時の事象を表している。kāna Pが『前過去』の事象を表すことは次のテキストの例でより明らかである。過去の出来事は通常、Pを用いて生起した順に述べるが、その順序に反してより古い出来事を後から述べる場合はkāna Pが用いられる。

(4) イタリアの女優、ソフィア・ローレンは先週ソフィアのベドハの町を訪問した(P₁)、...ソフィアはそこで見た事すべてに深い悲しみを示し(P₂)、こう語った(P₃)、...彼女はベドハを訪問した後ナイロビに戻り(P₄)、...、ローレンはソフィアへ出発する前に、ジュネーブの空港で新聞に次のように語っていた(kāna P₅)。[W: 85] P₁ < P₂ < P₃ < P₄、文脈から kāna P₅ < P₁

従ってこの場合、kāna Pはテキストの冒頭以外に現われる。複合形kāna Pの意味は構成的(compositional)で、過去時制を表すkānaと、kānaに相対的な過去時制と完了相を表すPが複合されて、大過去時制の完了相を表す。

ところが(2')の例はテキスト冒頭の文である。従って(2')のkāna Pの使用には、(4)の場合と異なる要因があると考えねばならない。データによると、テキストや章の冒頭にkāna Pが現れるのは1・2人称の場合である。これは、Pだけの場合1・2人称の直示的な意味が影響して、Pが「現在完了」に解釈される可能性があるので、kānaの付加によって過去時制を明示したものと考えられる。この場合意味の複合において、kānaが過去時制を表し、Pでは完了相の意味が優勢である。

さらに、(2')では“第二序文”という題と内容から『前過去』の事象であることが明らかであったが、次の場合は『前過去』の事象かどうか、少し曖昧である。

(5) ... hal kunta lāHaZta anna al-qiTār ta?aTTala ?

疑問詞 補2単男P 気づく2単男P ~ということを 定- 1車が 動かない3単男P

(「夜中におきた殺人のアリバイ尋問で」(「午前2時頃部屋を出ました。」「車が止まっているのに気づきましたか?」) J: 73)

殺人のあった時刻は不明で、他に『前過去』の基準となる『過去』の事象が文脈上はつきりしないので、午前2時に部屋を出たのが『前過去』の事象とはいいがたい面がある。むしろここでは直示的な2人称による「現在完了」の解釈“車が止まっているの気づいていますか?”ではなく、過去時制の解釈“その時車が止まっているのに気づきましたか?”を明示するため、kānaを付加したと考えられる。この場合の意味の構成は、kānaが過去時制を示し、

Pが完了相を表している。

他にkâna Pが『過去』の事象を表すのは条件文の場合である。条件文においてPは過去時制を示さないので、『過去』の事象はkânaを付加して表す。全般的に出現頻度の低いkâna Pが条件文に頻出するのはこのためである。

(6) law ijtahada, la-najaHa.

もし 努力する3単男P 強調 成功する3単男P (もし彼が努力すれば、成功するだろうに。)

(6') law kâna ijtahada, la-kâna najaHa.

もし 補3単男P 努力する3単男P 強調 補3単男P 成功する3単男P (もし彼が努力したら、成功しただろうに。)

kâna Pを用いる場合の時間副詞など文脈の役割は、例(1)の場合と正反対である。(1)の時間副詞は、Pが「現在完了」に解釈されるのを助けるが、(2')や(4)の場合、『過去』を示す文脈や時間副詞は、Pが過去時制を表すようにその解釈を助けるのではなく、これらの時間副詞の示す「時」に一致した形式kâna Pが用いられる。

次にkâna qad Pを検討する。この形もkânaが複合されているので『前過去』の事象を表すと予想されるが、kâna Pとの相違点を検討しなければならない。母語話者によると、kâna Pは単文ではやや不自然に聞こえることがあるが、時を表す表現を伴うと不自然さが消える。一方kâna qad Pでは、時を表す表現の有無に関わらず不自然さは感じられない。

(7) [^]kâna arsala / ^okâna qad arsala risâla ilay-hâ.

補3単男P 送る3単男P 手紙を ~へ -彼女 (彼は手紙を彼女に送った。)

(7') lamma zurtu bayt-hû, ^okâna arsala / ^okâna qad arsala risâla ilay-hâ.

~の時に 訪れる1単P 家を -彼の 補3単男P 送る3単男P 手紙を ~へ -彼女
(私が彼の家を訪れた時、彼は彼女に手紙を出した。)

(7')の時間副詞節は、先程のkâna Pの考察から『前過去』を示すものと解される。なぜkâna qad Pでは『前過去』を表す時間副詞が不要なのか、この例からは判断しがたいので、kâna qad Pの用いられている他の例をみる。

(8) kânat qad tazawwajat kaθiran.

補3単女P 結婚する3単女P 多く (彼女は何度も結婚したことがあった/何度も結婚していた。R:146)

(8)で表されている過去の経験/状態は「過去完了」の用法である。qad Pは「現在完了」を表すので、kânaと複合してkâna qad Pが「過去完了」だと考えられる。しかしqad Pの検討がまだなので、構造から「過去完了」であることを以下で示す。

kâna qad Pが複文に由来することは§2で述べた。この複文は付帯状況(Hâl)節で、主節で示された事物の付帯状況を動詞や分詞、名詞などで表す。特に動詞の場合、一定の形式があり、“完了形”を用いる場合には(9)のような構造となる。Hâl節の動詞P₂の示す出来事時は主節動詞P₁の出来事時に先行することが多い。

(9) [P₁ S₁ (wa) qad P₂ S₂] "S₂ having P₂-en, S₁ P₁"

S₁は主節主語、S₂はHál節主語である。たいていの場合、Hál節主語は主節の主語か目的語と同一なので表示しない。waは等位接続詞で、主節主語とHál節主語が異なる場合は省略できない。(9)においてP₁が過去を示す動詞kánaで、S₁=S₂となった結果、接続詞waが消えて[kána S₁ qad P₂]が生成される。その意味は"having P₂-en, S₁ was."で、「ある事物(S₁)にある事象が生起した(P₂)後の、過去のある時点におけるその事物(S₁)の存在(状態)」を表し、「過去完了」の時間的な意味に一致する。「過去完了」は『前過去』に生じた出来事を『過去』の視点からみるので、『過去』における結果状態も表す。従って(3)で過去時制と解釈されるし、(7)では『前過去』時を示す時間副詞節を必要としない。

「過去完了」は過去の結果状態を表すが、本稿のデータをみるとkána qad Pは場所の移動を表す動詞に多く用いられ、その結果状態を含意する。例えば、šahaba "行く", já'a "来る", waSala "着く", Gádara "去る", waqa?a "着る", waDa?a "置く"などがある。náma "寝る/眠っている"のような動作的な意味と状态的な意味をあわせもつ動詞と違って、場所の移動を表す動詞の意味は結果状態を直接表さない。このときkána qad Pによって、過去における結果状態(おおむね不在や存在)が推論される(例 送ってしまった→もはや手元には無い, 置いた→在る)。

kána qad Pは、「完了」特有の意味に加え『前過去』の事象も表せるので、単に『前過去』の出来事を表す「大過去時制」のkána Pの代用として使われる。その結果、kána qad Pの出現頻度はkána Pに比べ圧倒的に高く、kána Pは全般的に出現頻度がきわめて低い。kána Pの使用は個人差が大きく、非文法的と判断する母語話者もいる。kána Pが使われているテキストはニュースや歴史記述など、出来事間の前後関係を重視し、結果状態よりも出来事自体を述べる性質のものである。kána qad Pは、語りのテキストで中心的出来事を語る前の情景描写など、過去の状態を表すことが多い。

3. 2. 関係節のP, kána P, kána qad P

最初にアラビア語の関係節の構造を説明しておく。アラビア語の関係節は主節に後続し、主節の先行詞を関係節中に代名詞で再掲する。さらに、先行詞が限定名詞の場合のみ関係代名詞(人称・性・数により変化)を用いる。先行詞が非限定の場合は関係代名詞を用いず、関係節をそのまま主節に後続させる。自由関係節の関係代名詞は、man(人間)またはmá(人間以外)を用いる。関係節の制限的/非制限的用法は形式上表されず、文脈によりどちらかに解釈される⁹⁾。

主節が過去時制で、関係節が主節より古い過去の事象を表す場合、P, kána P, kána qad Pが用いられる。

(10) akmalā al-ʔamal allāḏi amarāt -hu bi-hi.

完了する3単男P 定 -仕事を 関代 命じる3単女P-彼に ~を-それ

(彼は、彼女が命じた仕事を終えた。)

(11) aSdara al-kutub allati kāna naqala-hā min al-faransiyya.

出版する3単男P 定 -本を 複 関代 補3単男P 訳す3単男P-それを ~から フランス語

(彼はフランス語から訳した本を出版した。)

(12) ibtaʔada min al-nār allati kānat Harāra-hā qad waSalat ilay-hi.

遠ざかる3単男P ~から 定 -火 関代 補3単女P 熱が -その 達する3単女P ~へ -彼

(=彼はその熱が自分のもとへ達した火から遠ざかった。→彼は火から遠ざかったが、その熱は彼のもとまで達していた。A:28)

これらの時間指示上の重複は、主節の場合と同様に説明できる。まず kāna Pは、時間副詞や前後の文脈によって『前過去』の事象ということが明らかな場合に用いられる。例(11)の先行文脈は次のとおりである。

(11') aSdara al-kutub allati kāna naqala-hā min al-faransiyya.

出版する3単男P 定 -本を 複 関代 補3単男P 訳す3単男P-それを ~から フランス語

([パリで数年間研究に従事した後ロンドンに戻り、]彼は、[パリにいた時に]フランス語から訳した本を[ロンドンで]出版した。)

また、関係節の動詞の人称が1・2人称であることによる「現在完了」の解釈を防ぐため、kāna Pが用いられるのも主節の場合と同じである。

(13) zidtu ʔalay-hi ziyādāt fi umūr φ ^okuntu nasitu-hā /[^]nasitu -hā.

加える1単P ~上に -その 追加を 複 ~に 事柄 複 関代 補1単P 忘れる1単P-それを 忘れる1単P -それを

(私は(第一版で)忘れていた事柄をそれ(=第二版)に付け加えた。H:序文)

(13)は関係節の事象が『前過去』時または『過去』時のものであることを示さなければ、「私が忘れた」ことと「私が忘れたことを付け加えた」ことがほぼ同時に解釈でき、論理的に不自然である。

本稿のデータでは自由関係節にkāna Pが多くみられる。これは自由関係節のPは時制より相の意味が優勢になるので、過去時制をkānaの付加によって表すためであると考えられる。

(14) mā yarā-hu al'āna huwa mā ^okāna ra'ā/ra'ā-hu qabla an yaTruqa al-raSās

関代 見る3単男IP-それを 今 それは 関代 補3単男P見る3単男P -それを 前に ~ことの 撃つ3単男IPs 定-弾を

(彼が今見ているものは、銃を撃つ前に彼が見たものである。HM:62)

(14)の2つの自由関係節において、現在の行為はIPで表しているが、過去の行為にはPではなくkāna Pを用いている。母語話者もPは可能であるが、kāna Pの方がより適格であると判断した。未完了相・現在時制の基本形IPに対立するのは完了相・過去時制を表す基本形Pのはずであるが、kāna Pが適格ということは、Pが過去時制を明示していないことになる。これは自由関係節がその本質上、ある時点で起った特定の出来事-即ちその事象を時間軸上に位置付ける時制-を表すよりも、名詞に置き

かえられるような不特定の内容を表すためである。

例 mā HadaṠa "生ずるもの" → "出来事", mā maDā "過ぎるもの" → "過去"

また主節の場合と同様に、(11')の文脈や(14)の時間副詞節「銃を撃つ前」は、Pが過去時制を表すと解釈されるよう補助するのではなく、時間副詞節などの示す「時」に一致した形式kāna Pを要求する。

kāna qad Pの場合は、表す事象が『前過去』時のものであることを明示するとともに、『過去』時の状態を表す。通常、主節で表される『過去』の事象が、関係節の『前過去』の事象の基準となる。それで場合によっては関係節の事象の結果が主節の事象に深く関連する。

(15)=(12) ibtaʔada min al-nār allati ʔkānat Harāra-hā qad waSalat ilay-hi.
遠ざかる3単男P ~から 定-火 関代 補3単女P 熱が -その 到達する3単女P ~へ -彼
(彼は火から遠ざかったが、その熱は彼のもとまで達していた。A:28) [結果状態]

(15)では、火の熱が彼のもとまで達し、その結果熱くてたまらないので火から遠ざかったということを含意する。ただし関係節の事象の結果が、主節の事象が生起するときに残っているかどうかは語彙アスペクトや文脈によるので、常に結果が残っているとは限らない。

(13') zidtu ʔalay-hi ziyādāt fi umūr ʔ kuntu qad nasitu-hā.
加える1単P ~上に -その 追加を 複 ~に 事柄 複 関代 補1単P 忘れる1単P-それを
(私は(第一版で)忘れていた事柄をそれ(=第二版)に付け加えた。H:序文)

(13')のように、(13)の関係節の動詞形式をkāna qad Pとすることも可能である。結果が残っているとすると、「忘れてしまっている」状態でありながら、それを付け加えたことになり論理的に矛盾する。

また、「過去完了」形のkāna qad Pには「経験」の用法もある。

(16) Talabtu qiTʔa mūsīqiy ʔ kāna qad ʔazafa -hā fi Hafla al-yawm al-sābiq.
望む1単P 部分を 音楽の 関代 補3単男P 演奏する3単男P-それを~で パーティー 定-日 定-前の
(私は、彼が先日のパーティーで演奏したことのある曲を所望した。CA:64)

以上は関係節にkānaの複合した形式を用いた場合である。しかし、例(10)で示したように、主節より古い過去の事象はPで表すこともできる。すると、関係節のPは主節に相対的な過去に解釈されるが、次のように、そうでない場合もみられる。

(17) taHaddaṠtu maʔa jār-y allaṠi zāra amirikā baʔda yawmayn.
話す1単P ~と 隣人 -私の 関代 訪れる3単男P アメリカを 後で 日の 双
(私は、二日後アメリカに行った(E₂)隣人と話をした(E₁) → 私は隣人と話をしたが、その人は二日後アメリカへ行った。) E₁ < E₂

(10)と(17)を矛盾せず説明しようとすれば、関係節の時制は常に絶対時制であり、主節との時間的な関係は文脈から解釈されると考えられる。それで、文脈から(10)の場合は主節時より古い過去の事象、(17)の場合は主節時以降に起こった過去

の事象と解釈される。

しかし、この考えは2つ問題点がある。ひとつは(17)のような解釈は少なく、一般的に、関係節のPは主節に相対的な過去時制と解釈されることである。母語話者が(17)を聴いたとき、即座に意味をとることができなかった。そしてmin Hadiθ-y “私の話”を文末に加えた方が容易に解釈できるとコメントした。もうひとつは、自由関係節の場合以外にも、関係節が過去時制を表わさない場合があることである。

(18) kânat al-afjâr tuxafxiſu fi al-ſawâri? allati Gafiya -hâ al-Zalâm.

補3単女P 定-木が 覆 騒めく3単女IP ~で 定-大通り 覆 関代 覆う3単男P -それを 定-暗闇が

(暗闇のおりた大通りで、木々がざわざわ音をたてていた。Q:125)

「暗闇がおりた」のは「木々が音をたてていた」以前と解釈されるが、「暗闇がおりた」のが過去のある特定時(即ち過去時制)の出来事とは感じられない。関係節のPの意味に対立するのは、IP(yaGfâ)によって“暗闇が火葬におりていく大通り”という意味を表す未完了相である。関係節で動詞の基本形が時制を表さないで相を表すことは、関係節が分詞-即ち時制を表さない形式-を用いて書き替えができることから明らかである。

(19) li-'ajl allaði sabaqa ðikru-hu [完了形を用いた関係節]

~の為に 関代 先行する3単男P 言及が -その (先に言及したものの為に)

=(19') li-'ajl al-sâbiq ðikru-hu [分詞]

~の為に 定-先行する単男分詞 言及が -その (例は、Beeston 1970: 95による)

関係節でPが時制を示さないのは、関係節の形容詞的機能による。関係節がある過去の出来事を表すのではなく、先行詞を修飾する単なる形容詞に置きかえられる場合、関係節のPの時間的な解釈は、関係節に最も関係の深い文脈である主節に基づく。

従って、関係節のPは主節に相対的に解釈される場合と、絶対時制の場合がある。主節に基づいて解釈される場合、(18)のように形容詞的な機能が強く完了相として解釈できるものから、(10)のように出来事として相対的過去時制と解釈できるものまで様々である。

どういう場合に関係節のPが絶対時制で、主節よりも後の出来事を表すのか。主節より相対的に未来の事象は通常sa-IPを用いて表す。

(17') taHaddaθtu ma?a jâr-y allaði sa-yazûru amirikâ ba?da yawmayn.

話す1単P ~と 隣人-私の 関代 未来-訪れる3単男IP アメリカを 後で 日の 双

(私は、二日後アメリカに行く隣人と話をした)

しかしsa-IPの代わりにPを用いると、表す事象が事実であり、主節の事象時ではなく、話者の発話時点を基準にしている。そして、例えば関係節の事象が、主節の事象が生起した時点では全く予想されないような場合に用いられる。

(20) fa- tazawwaja bi-ǰábba φ laʔibat bi-mál-hi.

そこで 結婚する3単男P ~と-若い娘 関代 遊ぶ3単女P ~で-お金 -彼の

(そこで彼は若い娘と結婚したが、彼女は彼のお金で遊び暮らした。H:37)

(20)は「彼のお金で遊び暮らした娘と結婚した」のではない。これは自叙伝の一節で、作者の目を通して物語全体が語られている。しかも、結婚した男は結婚するとき、妻となる女性が浪費家とは知らなかったであろう。関係節のPの代わりにsa-IPを用いると、彼のお金で遊び暮らすであろうことが結婚時点でわかっていたように響く。これは次の例と比較すると明らかである。

(20') fa- tazawwaja bi-ǰábba φ sa-taʔTiy la-hu saʔáda .

そこで 結婚する3単男P ~と-若い娘 関代 未来-与える3単女IP ~に-彼 幸福を

(そこで彼は自分を幸せにしてくれるであろう若い娘と結婚した。)

4. 付帯状況(Hál)節のqad Pとkána qad P

過去の出来事を表す文の付帯状況は、qad Pまたはkána qad Pによって表され、両形式間で機能上の重複がみられる。両者の違いはkánaの有無による、時間に関したものであることが予想される。実際、データをみるとqad Pは主節に対し先行・同時・後続の時間関係を示すが、kána qad Pは常に主節に時間的に先行した内容である。しかも、qad Pは事象を動的に、kána qad Pは結果状态的に表す。

(21) Gádara al-qarya wa- qad Talaʔa al-qamar. [先行/ほぼ同時・動的]

出発する3単男P 定 -村を そして 昇る3単男P 定 -月が

(月が昇ったので/月が昇った時、彼は村を出発した。)

(21') Gádara al-qarya wa- kána qad Talaʔa al-qamar. [先行・結果状态的]

出発する3単男P 定 -村を そして 補3単男P 昇る3単男P 定 -月が

(月が昇ってしまっていたので、彼は村を出発した。)

次の例はqad Pが主節に時間的に後続する場合である。kána qad Pを用いることはできない。

(22) sayyára-y taʔaTTalat faj'atan wa- qad taraktu/*kuntu qad taraktu

車が -私の 故障する3単女P 突然 そして させる1単P 補1単P

sá'iq-há yuHáwilu iSlâh al-xalal bi-hâ. [後続・動的]

運転手に -その 試す3単男IP 修理を 定 -故障の ~に-それ (私の車が突然故障した。それで運転手に故障を修理させた。R:11)

さらに、qad Pは主節と内容上関連性が強いが、kána qad Pは主節の出来事とそれほど関連性が強くない。

(23) asraʔa istiǰbál-hâ. kánat qad balaGat/*qad balaGat al-θaláθina min

急ぐ3単男P 迎えることを -彼女を 補3単女P 達する3単女P 定 -30 ~の

?umr-hâ aw akθar qalilan, wa- qad taðakkara-hâ fatâ muntali'a Hayâ.
 年令 -彼女の 又は より多い 少し そして 思い出す 3単男P-彼女を 娘として 満ちている 生命が

(彼は急いで彼女を迎えた。彼女は30才過ぎになっていた。彼は、生き生きした少女だった彼女を思い出した。R:169)

最初の文の「彼が彼女を迎えた」行為は、3番目の文のqad Pによる「彼が少女時代の彼女を思い出した」行為と直接結びつくが、2番目の文のkâna qad Pで表された「彼女が30才過ぎになっていた」事象自体は、最初の文の内容から独立している。これは(23)の主語の違い(彼/彼女)にも反映している¹⁰⁾。

kâna qad Pが先行文から時間的に離れ内容的関連性が弱いことから、この形式によって、話者の関心が先行文の事象から別のものへ移動するのを表すことができる。次の例では、Hâl節にkâna qad Pが用いられ主語riqq-hu “彼の唾”が明示されているが、母語話者の判断によると、(内容からは状態を表すkâna qad Pがより適格であるが)もしqad Pを用いるなら主語riqq-hu “彼の唾”を明示しないのが普通である。

(24) axaða yabHaθu ?an riqq-hi wa-^okâna riqq-hu qad jaffa /wa-[^]qad jaffa.

始める3単男P 探す3単男IP~を 唾 -彼の そして 補3単男P 唾は -彼の 乾く3単男P 乾く3単男P

(彼は唾を探り始めたが、唾は乾いていた。Q:18)

先行文に現われたriqq-hi “彼の唾(属格形)”は、Hâl節で主語としてkânaとqad jaffaの間に再掲されている。qad Pの場合なぜ主語を再掲しないのか、なぜkâna qad Pよりも先行文の内容と関連が強いのかは§ 6.2で検討する。kâna qad Pの主語はkânaとqad Pの間に位置するが、動詞の前の位置はV S O語順のアラビア語では主題位置である。kânaは語彙的な意味をもたないので、その後続く主語がHâl節において第一の重要な情報となり、(24)で話者の関心は彼の動作から彼の唾に移る。(25)は主語以外の主題の例である。

(25) kânat arD al-Gurfa qad Gusilat wa-?alâ al-mâ'ida kâna qad nušira GiTâ'.

補3単女P 床は 定一部屋の 洗う3単女P受 そして ~上に 定-テーブルの 補3単男P 広げる3単男P受 覆いが

(部屋の床は洗われていたし、テーブルの上にはカバーが広げられていた。QM:72)

後の文の主題は修飾語であり、話者の視線は場所から場所に移動している。

5. 文レベルにおけるPとqad Pの意味・機能の違い

qadは過去を近接化する機能と強調の機能をもつ。従って完了相・過去時制を示すPに複合して「現在完了」や「過去の事象の強調」を表すが、実際にはそのどちらでもない場合があり、qad PとPの違いが曖昧になる。また逆にPが現在完了を表す場合、qad Pは現在完了を形式的に明示しているといえるが、明示する際の必要条件はこれまで示されてこなかった。さらにqad Pは、その出現環境に顕著な偏りがみられるがその説明もなされていない。本節ではまずqadの機能に関する先行研究を概観し、その後qad Pの頻出/稀出をその環境の構造と機能から分析して、そこ

からPとの違いを検討する。

5. 1. qadの機能に関する先行研究と問題点

qadの機能について、伝統文法では「過去の近接化」と「強調」の2つを挙げている(Wright 1898 2: 4)。現代の研究も基本的に同じで、伝統文法の「過去の近接化」に対応した「現在完了」(McCarus 1976, Holes 1994など多数)と、「強調」に対応した「epistemic modalのemphatic mode」(Nishio 1988, 本質的に同様の主張としてDahl & Talmoudi 1979)がある。以下では2つの機能を「現在完了」と「emphatic mode」として論を進める。

qadの機能として挙げた「現在完了」と「emphatic mode」は、伝統文法の記述では相補的であり、一方だけでqadの機能のすべてを説明できない。「現在完了」の現れ方は言語によって時制寄りのものから語用論的なものまで様々であるが、例えば英語では、過去を示す時間副詞との共起制限から「Extended Now」と定義したり、事象が生じた過去の特定時を指すものではないので、「Indefinite Past」と定義している。qad PはPに比べ時間副詞類を伴わないことが多い点でIndefinite Pastらしさをみせる。

(26) i?taqadtu anna al-iSāba qad afqadat-hā al-ḥākira.

思う1単P ~ということを 定- 事件が 奪う3単女P -彼女に 定- 思い出を

(私は、その事件が彼女から思い出を奪ったと思った。R:111)

(26') i?taqadtu anna -ki ša?arti bi-xawf Hina ra'ayti al-Sūra.

思う1単P ~ということを-貴女が 感じる2単女P ~を-恐怖 ~の時に 見る2単女P 定-絵を

(私は、貴女がその絵を見た時、恐怖を感じたのだと思った。R:174)

またqad Pは、動詞句の語彙的な意味に応じて「現在完了」の用法である近接過去・結果・経験の解釈¹¹⁾ができる。これらの用法をPで表す場合は、現在時を示す文脈が必要である。次の例は経験を表すqad PとPである。

(27) *ra'ā /[△]qad ra'ā¹²⁾ /[○]la-qad ra'ā al-asad.

見る3単男P 強調 定-ライオンを (彼はライオンを見たことがある。)

(27') ra'ā al-asad min qablu.

見る3単男P 定-ライオンを ~から 前に (彼は以前ライオンを見た。→彼はライオンを見たことがある。)

しかし、qad Pは次の例のように特定の過去時を指す時間副詞と共起するので、Indefinite PastとExtended Nowの両方に反する。この場合、もう一つの「emphatic mode」の機能として解釈することができる。

(28) qad kataba al-kitāb fi sana 1993/amsi.

書く3単男P 定-本を ~に 年 昨日

(彼はその本を1993年に/昨日書いた。)

ところで、Beeston(1970: 76)やDahl & Talmoudi(ibid.: 58)はqad Pが時制を表さないと考え、次のようにqad Pを過去にも現在にも解釈できるとしている。

(29) qad Sabbat el-maTaro. (Dahl & Talmoudi ibid.: 例(18))

降る3単女P 定-雨が "It is/was raining."

しかし筆者が母語話者に確認したところ、(29)を"It rained."と訳し"It is raining."にはIPを用いた。qad Pが過去時制を示す例は他にもある。

(30) qad kâna al-malik ?âdil.

~である3単男P 定-王は 公正な (王は公正だった、/*王は公正である、)

従ってqad Pはあくまで過去に生じた事象に基づくが、過去の近接化の機能によりその結果状態を現在に結びつけるため、現在の事象と解釈されるにすぎない。また出来事の結果が現在時で存在するということは、qad Pの形式の意味に含まれていない。結果が存在するか否かは文脈によって決定されるのである。

(31) qad aGraqa al-šubbâk, wa- al-'âna inna-hu maftûH.

開める3単男P 定-窓を そして今 (強調)-それは 開いて

(彼は窓を開めたが、今それは開いている。) cf. *He has shut the window and now it's open.

英語の現在完了を基準にすると、(31)のqad Pは「現在完了」を表していないと考えられる。そうすると「emphatic mode」の機能が考えられるが、一旦ある事象を強調した陳述にそれを取り消す内容が後続するのは、強調の効果に反するよう感じられるが、qad Pによる強調は伝統文法で次のように説明されている。「qadによる強調は、不確かに思われていた事が実際に起こった場合や、なんらかの予想や状況に応じて、またはそれに反してある事が生じた場合に用いられる」(Wright 1896: 286 例(32), (33)もWrightによる)

(32) kuntu arjuw majiy'-hu fa- qad jâ'a.

補1単P 望む1単IP 来る事を 一彼の すると 来る3単男P (彼が来ればと思っていたら、彼が来た。)

(33) kâna sâlim SaHîH, fa- qad mâta.

~である3単男P 健やかな 健康な すると 死ぬ3単男P (彼はとても元気だったが亡くなった。)

qadはある特定の語句や陳述を単に強調するのではなく、疑いや不確かさなど、ある状況を伴うものである。従って、強い主張の表現があっても必ずqadを用いるとは限らない。

(34) akkada al-dâiliy mil anna al-Hariq bada'a ?indamâ iſta?alat al-nirân.

断言する3単男P デイリー・マイルが ~を 定-火事が 始まる3単男P ~の時に 燃える3単女P 定-火が 復

(デイリー・マイルはその火事は[ランブから]火が吹き出した時に始まったと断言している、W: 83)

qadの機能について法性にに基づく分析立場を明確にしたNishioは、qadの機能は命題の確実さに疑いや不確かさが予想される場合、話者が十分な証拠によって¹³⁾それを保証するものである(ibid.: 323)と述べている。この説明は会話など対人性の

強いものには有効だが、それ以外の対人性の低い状況では、疑いや証拠が存在するかどうか、かなり曖昧である。次の例は百科事典の記事である。

(35) buniyat al-kûfa sana 17 li-hijra, wa- qad banâ -hâ abû waqqâS...

建てる3単女P受 ケーファは 年 ~に-ヒジュラ暦 そして 建てる3単男P-それを アブー・ワッカースが

wa- qad summiyat al-kûfa li-istidâr-hâ...

そして 呼ぶ3単女P受 ケーファと ~で-円形 -その

(イラクの都市の建設) (ケーファ:) ケーファの都市はヒジュラ暦17年に建てられた。アブー・ワッカースが(2代目カリフ、ウマル・ブン・ハッターブの命により)それを建てた。その丸い形(と人々の集まり)からケーファと呼ばれた。I:123)

文脈から、百科事典の著者が読者が都市の建設年には疑いをもたず、その建設者や都市の名のいわれには疑いをもつと予想してqadを用いたとは考えにくい。また過去の事象なので「現在完了」の解釈も不可能である。

また確実さを保証する性質から、通常qad Pは肯定平叙文で用いられるが、疑問文や推量表現に現れる場合がある¹⁴⁾。

(36) mâðâ ?asâ-hu qad ra'â ?

何を おそらく-後に 見る3単男P

([ある男の自殺理由を、一緒にいた友人達は見当がつかないと語る。ある人物が「自殺してしまうような何かを二階から見たからだ」と推理する。それを聞いた友人達が言う]「彼は何を見たのだろうか?」R:24)

(36)では、友人達が「彼が何かを見た」事に対し十分な証拠がなく半信半疑であるにも関わらずqadが現れている。もちろん過去の出来事なので「現在完了」の解釈はできない。(37)は推量表現の例である。

(37) la?alla al-zâri? qad qaSada min al-Girâs an yaj?ala sûr.

おそらく 定-農夫は 企てる3単男P ~から 定-木 復 ~を 造る3単男IPs 解を

([家の周りに植わっているいろいろな木を見て]おそらく農夫はそれらの木で解を造ろうとしたようだ。Q:30)

この例は「現在完了」の解釈が可能かもしれないが、十分な証拠に基づく主張である「emphatic mode」の機能と推量表現とは矛盾する。

以上、qad Pの機能について「現在完了」でも「emphatic mode」でも説明できないものがあることを示した。先行研究では、相補的とされた2つの機能の共通点の考察や両者を包含する機能を設定する試みはなされていない。

5.2. 文レベルのqad Pの分布状況

qad Pの頻出/稀出する主な環境を次に挙げる。

[1] 頻出する環境

[心理・知覚/伝達動詞の補文]

(38) i?taqada anna fu'ûn miSr qad taGayyarat.

思う3単男P ~ということを 事情が 復 エジプトの 変化する 3単女P

(彼はエジプトの諸事情は変わってしまったと思った。)

その他の心理/伝達動詞の例 ?arafa, ?alima "知る", fahima "理解する", aHassa "感じる", ra'â "見る", xuyyila, badâ "思われる", qâla, ðakara "言う" など
[提示的な語と共に]

- (39) fâja'at -hu al-hazza hâ huwa qad faraGa/*faraGa min ?add al-alf.
突然である3単女P -彼に 定 -震えが ほら! 彼は 終える3単男P ~を 数えること 定 -千を
([彼が金を数えている時] 突然彼は震えた。ほら! 彼は(ちょうど) 千を数え終えた。CA:14)

[innaに導かれる節]

- (40) na?am, inna-ka qad aHsanta ilay-ya fi-mâ maDâ.
はい (強着) -貴男は 善くする2単男P ~に -私 ~に-関代 過ぎる3単男P
(そうだ、貴男は昔私に善くしてくれた。S:190)

[ammâ~fa/waによる主題の転換・提示]

- (41) ammâ wa-qad inqadâ kull jay' fa- sa-ufDiy bi-sirr.
今や 過ぎる3単男P 全てが この それで 未来-知らせる1単IP ~を-秘密
(今や全てが終わったので、秘密を明かそう。S:200)

- (42) ammâ ba?du fa-qad waqaftu ?alâ muxtaSir târix al-yaman.
さて/ところで 止まる1単P ~上に 要約の 歴史の イエメンの
(さて、私はイエメンの歴史を要約した。T:9)

- (43) wa- qad faqadti al-ðikrayât wa- ammâ anâ fa- qad aSbaHtu fi Hall
そして 失う2単女P 定 -思い出 復 そして ~に関して 私は すると なる1単P ~に 解放
min al-Samt.
~から 定 -沈黙 (あなたは思い出を失い、私は沈黙から自由になった。Q:199)

[原因を表す接続詞faと共に]

- (44) laysa min sabil ilâ tabdîl al-qadr, fa- allâh qad xalaga al-nâs
ない ~に 方法 ~へ 変更 定 -運命の というのは 神は 創造する3単男P 定 -人々を
?alâ mâ narâ -hum.
~上に 関代 見る1復IP-彼等を (運命を変える方法は全く無い、というのは神が人間をこのようにお造りになったからだ。)

[付加説明]

- (45) ... wa- fawqa hâðâ fa- qad kâna fahd ðaqil al-Zill.
そして ~上に この すると ~である3単男P ファフドは 我慢できない
(...その上、ファフドは我慢できないくらい嫌な男だった。CA:13)

[譲歩に続く帰結]

- (46) ... wa- ma?a ðâlika fa- qad aHdaða anjâd-hâ ta' ðiran.
そして ~にも拘らず それ すると 創る3単男P 詩を 復 -その 印象的に
(...それにも拘らず、彼は印象的な詩を創った。)

(47) la-in kána ba?du fi al-θāniya ?aʃara min sinn-hi, la-qad kána
 強意-謙歩 ~である3単男P まだ ~に 定 -2 10 ~の 年 -彼の 強意 ある3単男P
 la-hu ?aZama al-rûH.
 ~に-彼 偉大さが 定 -魂の (彼はまだ12歳だったが、素晴らしい魂の持ち主だった。S:334)

[条件文の帰結部]

(48) la Gâba al-ʃaraf ?an al-'adab, la-qad Gâba kull ʃay'.
 もし 消える3単男P 定 -尊厳が ~から 定 -文学 すると 消える3単男P 全てが 事の
 (もし、文学から尊厳が無くなれば、あらゆることが無くなる。S:365)

[事実に反する条件文の前提部]

(49) la qad arsala nafs-hu ma?a Tabi?a-hâ, la-bakâ.
 もし 送る3単男P 自身を -彼の ~と共に 自然 -その 強意 泣く3単男P
 (もし自分の気持ちのおもむくままにしたなら、きっと彼は泣いだろう。AY:140)

[2] 稀出の環境

[時間副詞節]

(50) Hina *qad balaGat/^obalaGat risâla-hu ilay-hâ, waqa?a infijâr.
 ~の時に 達する3単女P 伝言が -彼の ~へ -彼女に おこる3単男P 爆発が
 (彼の伝言が彼女のもとに届いた時に爆発がおこった。)

[関係節]

(51) akmala al-?amal allaði qad amara -hu/^oamara-hu al-malik bi-hi.
 終える3単男P 定 -仕事を 関代 命じる3単男P-彼に 定 -王が ~を-それ
 (彼は王が命じた仕事を終えた。)

5.3. qad Pの分布の偏りに対する説明

qad Pがある環境に出現しないことと、頻出することとは異なる要因に基づく。出現しないのは文レベルの統語的制約に関与するが、頻出するのは、qad Pの頻出する文の表す意味が、qad Pの意味・機能に合致する場合である。(そして本節の最後で述べるが、qad Pの頻出する文が表す意味は談話的な機能に関与する。)

§ 5.1で先行研究の問題点をあげたが、先行研究の挙げたqad Pの機能は、分布の偏りの説明においても十分な説明を与えない。まず「現在完了」の機能は、Hâl節やlaw節の機能に本来関与するものではない。「emphatic mode」の機能の方は、Nishioが談話機能と明言しているので文脈の考慮が必要であり、§ 5.2に挙げた文レベルの環境にあてはめて、その説明の有効性を問うことは妥当ではない。しかし、ほとんど常にqad Pが現れる場合、qad Pが現れる文以外の文脈を考慮する必要はないであろう。その文の中に、qad Pの出現に必要な文脈が示されているから、常にqad Pが現れるのだといえる。そのような頻出環境は、提示的な表現やHâl節、

主題の転換などである。しかし、これらが常に「emphatic mode」で表されねばならない必然性はない。このように「現在完了」や「emphatic mode」の機能では頻出環境を説明しきれない。以下では、稀出環境と代表的頻出環境のHál節との機能の類似から、qad Pの稀出理由を説明する。

5.3.1. qad Pの稀出環境と複文でのqad Pの機能

qad Pは時間副詞節や関係節に現れない(Bahloul 1994: 143, McCarus 1976: 25)が、その理由はこれまで説明されてこなかった。「現在完了」の機能では関係節の場合を説明できないが、時間副詞節に対しては、過去の特定時を表さないという性質から説明できる。「emphatic mode」機能の場合は、関係節も時間副詞節も陳述の中心でないから確実さを主張する対象にならない、従ってqad Pが用いられないと考えられる。しかし、陳述の中心でなくても聴者側に疑いがあり、話者に十分な証拠がある状況も可能なわけで、なぜ一貫して時間副詞節にqad Pが用いられないのか問題である。

そこで、Hál節の構造と機能から説明を試みる。Hál節に使われる動詞“完了形”はPよりもqad Pが適切である。

(52) ra'á al-walad qad Gasala/ Gasala yaday-hi bi-al-Sábún.

見る3単男P 定-少年が 洗う3単男P 手を 双-彼の ~で-定 -石鹸

(彼は、少年が両手を石鹸で洗ったのを見た。)

なぜqad Pが適切なのか、Nishioの説明によると、Hál節で事象に関する詳しい情報を聴者に与えその内容を確認するためである(ibid. 336: 註21)。しかし(52)に確認の必要を促す疑いは感じられないし、詳しい情報が重要なので強調するのなら、ある陳述に続く関連した陳述は全て新情報で重要であるから、qad Pの使用される環境はHál節以外にもほとんど無限に存在する。

Hál節は形式的には等位接続詞waによって主節に並置されているが、意味的には従属節の構造である。Hál節と主節との順序を入れ替えることはできないし、Hál節の動詞(句)が主節では表さない種類の相を示す(McCarus 1976: 25 例37)。

(53) ǧáhadt-hu yarkabu al-HiSán.

見る1単P -彼を のる3単男IP 定-駄 "I saw him riding the horse."

動詞yarkabu "to ride"は、主節で表わさない進行相をHál節で表している。これはHál節が語彙や形式の意味を変化させる意味構造をもっているためである。動詞句の意味は、主節では語彙の意味に形式のもつ時制と相の意味が加わったものになる。Hál節では、その上にさらにHál節の構造の意味がくみあわさって、(53)のような現象がおこると考えられる¹⁵⁾。

主節の付帯状況、理由、譲歩などを表すHál節の機能は、関係節や時間副詞節の

機能と共通する。関係節が主節に対し専ら制限的に機能するのにに対し、Hál節はもともと限定(definite)された事物に付加的に機能するものであるという違いがある。しかし実際は、Hál節が不特定(non-specific)の事物に用いられて制限的に機能していると解釈できる例は多い¹⁶⁾。

(54) kána yasTuru -hu bi-misTara hiya waraqa samika qad fudda
 補3単男 線を引く3単男IP-それに ~で-定規 それは 紙 厚い 押しつける3単男P受
 ?alay-há xayT fi makán suTúr.
 ~上に -その 糸が ~に 場所 線の 複

(彼はそれに定規を使って線を引いていたが、その定規は行の位置に糸を押しつけた厚紙である、H:3)

Pも非限定の先行詞の関係節に多く見られるが、次の例のように先行文と後続文で時制形が異なるため、Pが独立した文の動詞ではなく関係節の動詞であることが容易にわかる場合などに現れやすいようにみえる。

(55) inna-hu yuqimu fi manzil φ intaHara fi-hi Sadiq sábiq la-hu.
 (強調)-彼は 住む3単男IP ~に 家 関代 自殺する3単男P ~に-それ 友人が 前の ~の-彼
 (彼は以前の友人が自殺した家に住んでいるのです、R:10)

時間副詞節の接続詞には2種類あって、一方は前置詞と関係代名詞máが結びついたものである(例 ?inda-má "~の時", sur?ána má "~するや否や")ので、関係節に準じて説明できる(他方の接続詞は名詞の対格に由来するもので、それについては§5.3.2で説明する)。結論として、Hál節と関係節・時間副詞節の間には次のような機能・構造上の対応があり、qadは複文において従属節を示す標識であるといえる。

[関係節] ... N	RP	P	[時間副詞節]	Tadv(=prep. + RP)	P1, P2	
[Hál節] ... N	qad	P	[Hál節]	P2,	qad	P1

またqad Pは稀に関係節に現われ、「結果状態」や「強調」を表す。

(56) lammá kána ixtiláf má qad ?alimtum, xiftu an yaxruja al-amr ?an yad-y.
 ~の時に ある3単男P 違いが 関代 知る2複男P 怖れる1単P~を 出る3単男IP定 -事柄が ~から 手 -私の
 (あなたが知っていることに食違いがあったので、その件が私の手に負えなくなるのを懸念した、K:38)

(57) ayna al-mál allaði qad arsaltu-hu ilay-ka ?
 どこに 定 -お金が 関代 送る1単P -それを ~に -貴男

(「確にお金を送ったのに、受け取ったのを否定する相手に返還を要求して」私が貴男に確かに送ったあのお金はどこか?)

従って、複文のqad Pはまず従属節を示す標識であるが、既に関係代名詞が従属節を示している場合は不要なので関係節に現れない。しかし関係代名詞があるにも関わらず関係節にqad Pが用いられていれば、「現在完了」や「emphatic mode」の機能を示している。時間副詞節の場合も、接続詞が従属節を導くのでqadは用いられない。しかもこの場合「現在完了」の機能は、特定時を指さないの時間副詞節に現れないし、「emphatic mode」の機能も前述のように時間副詞節が陳述の中

心でないため確実さの主張の対象にならず、qadは現れない。

5.3.2. qad Pの頻出環境の説明

上の結果はHál節と意味構造が類似するanna/inna節に適用できる。anna節は主節が心理/伝達動詞の場合以外でも用いられ、inna節と共にqad Pが特に頻繁に現れる環境である。

- (58) al-jadid anna al-taHadduθ ilay-hâ qad Galaba al-taHadduθ ?an -hâ.
 定-新しい ~ということが 定-会話が ~への-彼女 優る3単男P 定-会話に 関する-彼女に
 (日毎に、彼女に話しかける方が彼女のことを話すことより多くなった。W:53)

anna/innaは本来提示機能をもつ。共にその直後に名詞の対格をとり名詞節を導く。元々inna節はinnaの提示機能により、意味的に[inna N] [qad P]と解釈された。[qad P]は提示された名詞Nに関して情報を付加するものである。その後innaが歴史的变化により本来の提示機能を失うと、意味的な再分節がおこり[inna] [N qad P]になった(Bloch 1986: 128)。anna節についても同様に考えられる。

さらに、Hál節でもこのような意味の再分節が考えられる。(9)で示したHál節の構造は、本来意味的に[P₁ S₁] wa [qad P₂ S₂]と区切られるが、P₁が補助動詞kânaの場合、S₁=S₂, wa→φとなって[kâna S] [qad P]ができる。kânaは過去を示す機能しかないので、意味上再分節され[kâna] [S qad P]となる。

- (59a) [inna N] [qad P] → [inna] [N qad P]
 (59b) [P₁ S₁] (wa) [qad P₂ S₂] → [kâna S] [qad P] → [kâna] [S qad P]

(59a)で動詞に先行する主題名詞は、多くの場合主語なのでN=Sとなる。innaの直後の名詞は対格なので、innaは動詞のような振舞いをするようにみえる。動詞的で語彙的な意味を持たないという点で(59b)のkânaと類似する。これらの構造を機能からみると、動詞に先行する主題名詞(topic)を持つので、主題-評言文のammâ~fa構造(頻出環境(43))とも類似している。

ところで、Pもinna/anna節、ammâ~fa構造に多くみられる。qad Pとの違いは、Pがより出来事的で、出来事の単なる陳述を表すのに対し、qad Pは状态的で、出来事の単なる報告を越えた話者の視点や判断を表すことである。

- (60) ammâ ixwa -hu fa- aGraqû fi DaHk, wa- ammâ umm-hu fa- ajhafat bi-
 ~に関して 兄弟は 彼-彼の すると 沈む3複男P ~に 笑い そして ~に関して 母は 彼の すると 泣く3単女P ~で-
 al-bukâ', wa- ammâ abû-hu fa- qâla
 定-泣くこと そして ~に関して 父は 彼の すると 言う3単男P

(彼の兄弟は大笑いし、彼の母は涙を流し、彼の父は言った・・・, AY:19) [出来事の列挙]

- (61) ruwiya anna al-sulTân ariqa ðâta layla wa- muni?a al-nawm.
 語る3単男P受 ~ということが 定-スルタンは 不眠である3単男P ある 夜 そして 妨げる3単男P受 定-眠りが

(伝えられるところによると、スルタンはある晩目が冴えて眠れなかった。) [伝聞]

(62) lam ya**lba**θ ān nasiya/*qad nasiya hāḏā kull-hu.

否定 留まる3単男IPj ~ということが 忘れる3単男P これを 全てを -その

(=彼がこのことを全て忘れたということは、長くかからなかった。→まもなく彼はこのことを全て忘れた。AY:38)

(62)のanはannaと同じく名詞節を導く接続詞で、両者の違いはやや曖昧だが、annaと異なり判断など心理作用の意味に関わらない動詞や名詞句と共に用いられることがある¹⁷⁾(例 lam yasbiq an~ "〜が先行しない", aḏar ḏālika an~ "その結果は〜である", baʔda an~ "〜の後で" cf. ʔarafa anna~ "〜と知る")。この場合anに導かれる出来事内容は、動名詞に置きかえることができる。

(63) baʔda an māta zayd (63') baʔda mawt zayd

~後で ~ということの 死ぬ3単男P ザイドが (ザイドが死んだ後で) ~後で 死の ザイドの (ザイドの死の後で)

(62)でqad Pが不適切なのは、結果状態や話者の視点・態度がqad Pの意味に含まれるので、それを動名詞に置きかえることができないためであろう。

これを用いて、名詞の対格に由来する接続詞が導く時間副詞節にqad Pが現れない理由を説明できる。アラビア語では、名詞はその直後の属格名詞によって限定修飾できる(iḏāfaと呼ぶ)。 $[N_1 N_2(属格形)]$ "N₂のN₁" 例 sāʔa ḏahabin 時計 金の(属格形) → "時計"。前の名詞が時を表す語の場合、後の名詞が節であることも可能(64)で、さらに前の名詞を対格にすれば時間副詞節となる(64')。

(64) Hin wulida (64') Hina wulida

時 生む3単男P受 (彼が生まれた時) 時に(対格形) 生む3単男P受 (彼が生まれた時に)

iḏāfa構造に由来する時間副詞節では、接続詞の後にくる節は動名詞に置きかえられるものでなければならない。qad Pは動名詞で表せない意味を含むので時間副詞節に現れることがないのである。

anna節などからわかるように、Pとqad Pの区別は語り手の表現態度(出来事の列挙か出来事を話者の視点を通したものか)に関わっていて、Pよりもqad Pが「現在完了」を明示するというたぐいのものでない。この点で補助動詞kānaをもつ複合形が時制を明示するのと異なる。アラビア語の「現在完了」は時制寄りのものではなく、語用論的なものである。次節では語りのテキストを利用し、テキストレベルでqadの機能や両形式の違いを検討する。

6. テキストレベルにおけるPとqad Pの機能の違い

6.1. 語りのテキストによるPとqad Pの分析

従来の記述では、語りのテキストにおいてPはForeground、それ以外の3形(qad P, kāna P, kāna qad P)はBackgroundの機能を示すと説明している(Holes 1994: 190, Wrightでは、Pは歴史的過去、qad PはHálと記述(1898: 1, 5)、McCarusではP

は語りのテンス、qad Pはperfectと記述(1976: 3)など)。しかし実際にテキストを検討すると、Pもqad Pも共にForegroundを表すこともあれば、Backgroundを表すこともあり、両形式の違いはFore-/Backgroundの対立で説明できるものではない。

(65) テキスト1 (M2:42)

	段落冒頭	テキスト構造・内容
ベルシャの王、フルムズ・ブン・キスラーは公正な王だった(P)。民の権利を定め(P)、力のある者には厳しく対し(P)、弱い者を力のある者の支配から守った(P)。	P	オリエンテーション1 (王の人柄と業績)
王は不正を受けた者が訴えを書いて入れるように、城の側に箱を設置することを命じた(qad P)。そして箱を王自身で開けていた(kâna IP)。	qad P	オリエンテーション2 (具体的な施策1)
また、その端が王座の傍にある長い紐を城の外に出すようにしたのもこの王である(IP)。それで不正を受けた者が来ては紐を引っ張って鈴を鳴らし(kâna IP)、王はその者を連れてくるよう命じ(IP)、訴えを聴いていた(IP)。	IP	オリエンテーション3 (具体的な施策2)
一頭の獲せたロバが王宮の傍を通りかかったということがあった(qad P)、ロバは紐をくわえて首を振った(P)。すると王は不正を受けた者を連れて来るよう命じた(P)、番兵は戻ってきて(P)・・・	qad P	一連の中心的出来事

(65)で、Pはオリエンテーション1と中心的出来事で用いられ、それぞれBack-とForegroundの機能を表している。qad Pもオリエンテーション2と中心的出来事に用いられ、それぞれBack-とForegroundの機能を示している。Foregroundの定義は一樣ではなく、中心的で展開的なものや、時間的に連続するものなどが挙げられている(Fleischman 1985)が、Pとqad PのForegroundの違いは、qad Pの方に時間的な連続性が欠けていることである。qad Pで中心的出来事を表す場合、常に一連の出来事の最初のものに用いられ、その後の連続的な出来事はPで表される。2番目以降のPがqadの省略されたものではない証拠に、qad Pは時間的連続を示す接続詞θumma "それから(英語のthenに相当)"の後には用いられない。

(66) aqbalat ?alâ al-mir'â θumma maddat/*qad maddat aSâbi?-hâ ilâ ſa?r-hâ.

近付く3単女P ~に 定 一錠 それから 伸ばす3単女P 指を獲 一彼女の〜 髪 一彼女の
(彼女は錠に近付いた。それから手を髪の方にやった。)

また、時間的連続と因果関係の2つの意味を表す接続詞fa(英語のsoに相当)は、Pと共に使われると前者の意味("そして")になり、qad Pと一緒に場合後者("〜というのは")を意味する。これもqad Pの機能に時間的連続性がないことを表している。なお、Pは接続詞faと共に使われる場合、主語の転換を示すことが多い。より中立的な接続には、wa"そして"(英語のandに相当)を用いる。

(65)で段落冒頭に現れる形式とテキストの構造・内容を付記したが、段落冒頭位置は本稿の分析に重要である。段落は書き手によって恣意的に区切られる点で、書き手の(恣意的な)視点の反映であるが、他方、段落はひとまとまりの主題構造をもち(Givón 1984: 245)、(65)にみるように段落という形式的な区切りは内容の区切りに対応している。qad Pが段落冒頭に現れていることによって、中心的出来事の

最初のものと同判断できるし、オリエンテーション2で先行オリエンテーションの内容を具体的に言い替えていると解釈できる。

さらに重要なのは、qad Pがテキスト冒頭には決して現れないことである¹⁸⁾。つまりqad Pは常に先行内容を必要とし、それに対して敷衍して述べる場合に用いられる形式と仮定できる。Pの方はテキスト冒頭に現れるし、先行内容とは時間的な連続性で結びついている。qad Pの先行内容に対する関連性を示す他の例を挙げる。

(67) テキスト2 (M2:54)	段落冒頭	テキスト構造・内容
<p>・・・ニュートンが入って来て(P)書類が灰になっているのを見た(P)、しかし、犬にこう言っただけだった(P)。「ああ、おまえは自分が何をしたかわからないのだ(IP)！」</p>	P	<p>一連の中心的出来事 (原稿の焼失)</p>
<p>それから、ニュートンは、研究に戻った(P)。その出来事にもう心を傾かせなかった(IPj)。そして、世界中の学者の間に、彼の記憶を留めたさまざまな理論を残したのである(qad P)。</p>	P	<p>中心的出来事(続き) 結び(qad P)</p>

ここではqad Pが、テキスト全体の結びの機能を果たしている。中心的出来事から導かれる最終的結果を表している点で先行内容との関連性を示す。同時に、中心的出来事から結びへというテキスト構造上の質的転換も表している。(68)は段落冒頭のqad Pが主題の転換を表している例である¹⁹⁾。

(68) テキスト3 (W:83)	段落冒頭	テキスト構造・内容
<p>・・・火はランプから化学薬品に燃え移った(P)。飛んだ火の粉は天井の木材に燃え移った(P)。エリザベス女王は火事の直後詳しい調査と防火対策を命じた(qad P)。</p>	<p>P qad P</p>	<p>一連の中心的出来事(火事) 中心的出来事(女王の行動)</p>

(68)では先行の火事の出来事に対し、qad Pはその出来事の中に存在する別の参加者を新たな段落の主題として取りあげており、「女王について言うと・・・」と書き替えられる。これは文レベルの主題-評言文に対応する。

また(67)では、Pによって表されている連続的出来事は途中で段落が替わっている。連続的な出来事は長いので、Pの場合でも段落の区切りや、接続詞faによる主語の転換が見られる。しかし物語り全体からみるとあくまで一連の出来事に属する。段落冒頭のqad Pによる先行内容との違い(転換)は主題に関するものであり、段落冒頭のPが示す先行内容との違いは、出来事の展開によるものであって、先行出来事からの時間的・内容的連続性は保っている。

(65)のオリエンテーションの場合、qad Pによる転換は、段落が変わることによって示されているが、Pの方にはそのような形式的な転換のしるしがみられない。オリエンテーション1において、王の人柄を示した後その業績を述べているのは主題の転換に見えるが、段落の区切りや接続詞faなどの形式的な転換の表示がないことから、語り手の意識内ではひとまとまりであると思われる。

以上、テキスト上のqad Pの機能は、前提の存在と先行内容との関連性、先行内容からの転換が関わることを述べた。(65)では、王の偉業を示すオリエンテーション1からその具体的施策のオリエンテーション2へ、さらにそこから語りの中心へ

転換している。つまり qad P は、先行内容(前提)を必要としそれに関連しつつ²⁰⁾ 視点を転換して新たな側面から述べるのに用いられる。

(65)の中心的出来事への導入は、一見先行内容と関連性がない。しかし、前提の存在が qad P には不可欠であることと、中心的出来事を語り始める P は時の表現を伴うのが通常であるのに、qad P では通常、時の表現を伴わないことから、先行内容に qad P がなんらかの依存をしていると解釈できる。

(69) テキスト4 (M2: 33)

	段落冒頭	テキスト構造・内容
ルカイヤは子猫を飼っていて (P=kāna)、とても可愛がっていた (kāna IP) …、	P	オリエンテーション1
子猫は大きくなり (P)、鼠を見ると必ず殺して (P)、家の中に鼠がいないようにした (P)、	P	オリエンテーション2
ある晩 (Tadv)、台所で火事がおきた (P)、猫は火を見て (P) ルカイヤの部屋に走った (P) …、	Tadv+P	一連の中心的出来事

Pによって中心的出来事を出す場合、時の表現によって出来事が位置づけられる。これは「時」が出来事認識の重要な土台だからである。qad Pの方は時の表現を伴わないので、中心的出来事を認識する際は先行内容に依存していると推測できる。時の表現との共起の違いは、文レベルで、Pがqad Pより時間副詞と共に現われることが多い事実と一致する (cf. (26), (26') では従属節の場合)。従って(65)のテキストは、「不正を受けた人は城に来て王に直訴していた。そういう状況の中で、あるときロバでさえもが王に訴えてた (そしてその訴えを聞き入れてくれるほど王は公正な人だった)」ということを表している。これは、(69)で猫が鼠を捕まえていたことと、猫が台所の火事に気づいたことの間にはみられないような関連性の強さを示している。

なお qad P の Background の機能は、付帯状況やコメントやテキストの結びにも現れるが、いずれの場合も先行内容がありそれに関連して視点を転じるものである。

6.2. qad P のテキスト機能の検討

ここでは上の分析で導きだした [前提の存在+視点の転換(関連性保持)] という機能の有効性を検討する。qad P がテキスト冒頭に現われず、常に前提を必要とすることは、自身は前提にならないことを意味する。ここでいう前提は語用論的なもので、テキスト上の関連をもつ先行内容や話者によって聴者が知りうる想定された内容である (Givón 1990: 645-46)。

語用論的な前提とそれに続く関連した主張のくみあわせで、文レベルで見られるものに次のものがあるが、これは qad P の頻出/稀出環境に合致する。

予測される出現環境例 ([前提] → [主張] (qad P の例))

[質問] → [答え] (40)

[中心的な出来事・判断] → [付帯状況・説明・根拠] (44), (45), Hál 節

[譲歩] → [譲歩に続く帰結] (46), (47)

予測される出現環境例(続き)

- [条件文の前提] → [条件文の帰結] (48)
[言語外事実] → [事実に反する条件文の前提] (49)
[主題の提示] → [それに対する評言] (39), (40), (43)

予測される非出現環境例 それ自身が前提となるもの

- [時間副詞節] (50) → [主節]
[関係節] (51) → [主節]

これにより、qad PがHál節に頻出することを説明できる。§ 5.3.1でHál節のqad Pの機能を従属節を示す標識という構造的な捉え方をしたが、この機能は上述のテキスト機能に由来するものである。Hálを表すもう一つの形式kána qad Pをテキスト上の出現位置からみると、qad Pと異なりテキスト冒頭に現われることができる。また先行内容と関連が無く、常にBackgroundとして働いている。文レベルでは両者に「完了」や「付帯状況描写」という共通点があるが、両者のテキスト機能は全く異なる。kána qad Pに比べ、qad PによるHál節が主節内容と関連が深いことはここからも説明できる。また、qad PのHál節で主語(主題)を再掲しないのは主節に依存する度合いが強いからである。Hál節では先行内容との転換は、qad自身によって表される。Hál節と類似の構造・機能をもつanna/inna節でも転換はqadによる。ammá~fa構造では、接続詞faによって転換が示されている。qad Pの頻出環境には接続詞faが現れることが非常に多い。

次に、関連性ということを付加説明(例45)と譲歩に続く帰結表現(例46)という頻出環境から検討してみる。qad Pの頻出環境と同じ意味を、Pを用いた別の表現で表すことができる。

(70) ... fawqa hāḥā fa-qad P ≡ (70') ... wa- P(ただしqad Pもありうる)
~比 それ すると そして

(71) ... maʔa ḥālika fa-qad P ≡ (71') ... ḥākin/bal P(ただしqad Pもありうる)
~と比 これ すると しかし / それどころか

なぜ同じ意味を表しながら(70), (71)では常にqad Pを用いるのかは、2つの要因が関わっている。まず、転換を表す接続詞faの存在である。次に(70), (71)は、先行内容を一旦指示代名詞で再掲しその後(fa) qad Pを続ける。再掲部分はqad Pに対する主題となっていて、単に2つを等価に並べる(70')や対比する(71')の場合よりも、先行内容との結びつきは強くなっている。

以上、文レベルの頻出環境に上述のqad Pのテキスト機能をあてはめて説明し、qad Pの機能と前提、関連性、視点の転換との関わりを示した。

ところで形式の頻出/稀出の偏りについて、P, qad P, kána P, kána qad Pの4つの形式のうち、qad Pとkána Pには分布に偏りがみられ、P, kána qad Pではそう

でないのは、語りのテキストを用いて説明すると次のようになる。Pは過去の出来事を、kâna qad Pは過去の状態を表して、物語という織物の縦糸と横糸として模様を編みだす。kâna Pはより古い出来事を生起した順に逆らって表現する手段であり (§ 3.1)、物語の構成法としては二次的である。qad Pは出来事の継起的な生起を述べるのではなく、ある出来事のある側面を主題として取り上げ述べるものである。従って物語構成の不可欠な要素ではないから、その出現環境が限定される。

6.3. qad Pのテキスト機能の適用

[前提の存在+視点の転換(関連性保持)]の説明は、「emphatic mode」や「現在完了」で説明できなかった § 5.1 の(35), (36), (37)を説明することができる。各々に前提と、それへの関わりと視点の転換がみられる。

(35) buniyat al-kûfa sana 17 li-hijra, wa- qad banâ -hâ abû waqqâS...

建てる3単女P受 クーファは 年に ~ヒ-ヒジュラ暦 そして 建てる3単男P-それを アブー・ワッカースが

(クーファの都市はヒジュラ暦17年に建てられた。アブー・ワッカースが(2代目カリフの命により)それを建てた。I:123)

前提=先行文:クーファの都市の建設とその年

視点の転換=後続文のqad P:都市の建設者の名前

(36) mâðâ ?asâ-hu qad ra'â ?

何を おそらく-彼に 見る3単男P

(「夕食の席で意気揚場としていた男が10分後二階で自殺した。原因がわからない友人達にある男が自分の推理を語る。)(二階の窓にカーテンは掛かっていませんでした。彼は何かをそこから見たのです。自殺に追いつく何を見たのでしょうか?) [友人達の答え]「彼は何を見たのだろうか?」R:24)

前提=先行テキスト:「自殺の原因は二階から何かを見たからだ」

視点の転換= qad P:「それでは一体何を見たのだろうか」

(37) la?alla al-zâri? qad qaSada min al-Girâs an yaj?ala sûr.

おそらく 定-農夫は 企てる3単男P ~から 定-植物 藪 ~ことを 造る3単男IPs 扉を

(「家の近くの畑には10年ぐらい経ったイチジクの木がある。家はバナナやナツメヤシに囲まれていて、その葉には土埃が見える。)おそらく農夫はそれらの木を扉の代わりにしようとしたようだ。Q:30)

前提=先行テキスト:家の周囲に木が植わっていて土埃を被っている(描写)

視点の転換= qad P:それらの木で埃避けの扉にしようとしたようだ(推量)

またlaw節に現れるqad Pもこのテキスト機能で説明できる。Nishioはコーランのアラビア語におけるlaw節のqadについて、事実と反するあり得ない命題は聴者に大きな疑いをおこさせるので、話者は聴者が条件の前提部分を否定して話者が本当に言いたい帰結部分を否定する結果にならないよう、ありえない出来事の可能性を確認する必要から用いる(1988: 333)と説明している。しかし母語話者によると、qadによって強い否定のニュアンスを感じるという(「そんなことは決してないがもし-」)。しかも前提部の内容が「あり得ない出来事」というのは、事実と反対の仮

定を示すlawによって、文頭で既に示されているので、帰結部を主張するためにqadによって、あえて前提部の可能性を確認したとは思えない。本稿で挙げたテキスト機能からlaw節のqad Pをみると次のようになる。

(49) law qad arsala nafs-hu ma?a Tabi?a-hâ la-bakâ.

もし 送る3単男P 心を 一彼の ~と共に 自然 -その 強調 泣く3単男P

([少年は地学のため故郷を離れるところで、母と別れることやもう遊べないことをとても悲しむ。] (・・・しかし彼は何も言わなかったし、悲しみを見せなかった。ただ無理に微笑みただけだった。) もし、自分の気持ちのおもむくままにしたなら、きっと泣いただろう。AY:140)

前提=先行テキスト:とても悲しい気持ちを抑えている

視点の転換=law節(反実仮想前提部)のqad P:自分の気持ちのままに振舞う

law節に先行するテキストに(小説の)事実を明示することにより、law節の内容との対照性を際立たせ非現実性を強く示す。(qadは単に非現実性を強調しているのではない。§5.1で注意したように、qadによる強調は先行状況を伴うものである。)

次の例は、事実と反する条件文において非現実性の程度が大きいことを、過去時制(kâna P)によって表している。(49)と比較すると、qadの機能が明らかである。

(72) law kuntu muttu, kuntu ?araftu inta fên.

もし 補1単P 死ぬ1単P 補1単P 知る1単P お前が どこに

([行方不明の息子を母親が必死に探す。] (可哀相な子。どこへ行ったのかしら。哀れなお前の母さん! 苦労してここまで育てたのに、突然お前を失うなんて。) もし私が死んだら、おまえがどこにいるかわかったらうに。CA:34)

前提=先行テキスト:子供が行方不明である

視点の転換=law節(反実仮想前提部)のkâna P:私(=母親)が死ぬ

「自分が死ぬ」ことは非現実なことであるが、(49)のようにlaw節の内容をより非現実と感じさせる事実の記述が先行テキストには無い。従って同じ非現実であっても、(49)の方が(72)より非現実性を強く感じさせる。従ってlaw節のqad Pの機能を、Nishioのように[前提部-帰結部]の関係からみるより、先行テキストで示した事実に基づいて非現実な仮定へ視点を転換した[先行テキスト-前提部]の関係²¹⁾でとらえるのがより自然である。

「現在完了」や「emphatic mode」の機能と、本稿で挙げたテキスト機能を比較すると、前の2つにも、ある状況や疑いなどの前提と、現在時の結果状態や確認の主張という転換が存在する。そしてテキスト機能のより限定された状況(例えば会話)や限定された機能(過去の近接化や確実性の主張)を示す。先行研究の2つの機能を包含する機能が「前提+視点の転換(関連性保持)」のテキスト機能である。

「現在完了」は過去の事象を現在時からみるので、テキストに用いられた場合、語り手を反映したコメントや結びに用いられたり、語り手にとって重要な過去の出来事を導入する。また、段落冒頭位置への出現は、書き手の視点による内容の区切りを反映する。「現在完了」のこのような用い方は他言語でも見られる²²⁾。「現

在完了」の談話機能は、従来「Current Relevance」と説明されているが、文を超えたレベルの機能と関連性の二点で「前提+視点の転換(関連性保持)」と共通する。

また中国語の「現在完了」の研究(Li, Thompson and Thompson 1982)で挙げられた談話機能“Current Relevant States”の具体的な現われ—「変化した状態」「誤った仮定の訂正」「これまでの進展」「次に起こること」「陳述のしめくり」—にはすべて「前提」と「転換」が存在している。

また次の例からテキスト機能が文レベルの機能に優越するといえる。

(73) fa- qad kâna qad famma hâðihî al-râ' iHa min qablu.

というのは 補3単男P 臭く3単男P これを 定-匂いを ~から 前

(というのは、彼は以前この匂いを嗅いだことがあったからである、HM:62)

(73)ではqadが2箇所に見れている。前の方は理由を表す接続詞faと結びついたテキスト機能を持ち、後の方は過去完了時制形を構成する文レベルの機能(時制・相)である。しかし、通常1つの節の中にqadが2度現れることは稀で、1度だけ用いられるが、その場合qadが見れるのは前の位置である。

(74) fa- qad kânat fakkarat fa- aTâlat al-tafkir...

というのは 補3単女P 熟考する3単女P そして 長くする3単女P 定-熟考を

(というのは、彼女はじっくり長いこと考えたので・・・B:19)

文レベルの機能を表すqadが消え、テキスト機能を表すqadが残るから、qadについてはテキスト機能の方が文レベルの機能に優越しているといえる²³⁾。

7. 複合形の構成素の順

§2で動詞の複合形形成の際に、補助動詞や副詞が繰り返し使われると述べたが、その順序には一定の規則があり、それに反するものは存在しない。複合形における時制・相・法性を表す要素は、次のような順に並んでいると仮定できる。

(75) Modality-Tense-Aspect-Lexical Meaning²⁴⁾

付録1の基本形と複合形の体系からわかるように、qad Pに対しkâna qad Pがあるが、qad IPに対し、kâna qad IPは存在しない。qad IPは全体で「現在の推量」を表す。基本形IPは、未完了相・現在時制を表すAspectとTenseに関わる要素であるから、qad IPのqadはModalityを表し、qad IPの構成素の順はM-[T, A-LM]と表せる。*kâna qad IPはkânaが過去時を指すTenseの要素なので、これをqad IPに付け加えてT-M-[T, A-LM]となるが、これは(75)に反する順序である。*sa-yakûnu qad IPも同様で、sa-yakûnuは未来を示すTenseの要素である。すると*sa-yakûnu qad IPはT-M-[T, A-LM]と表すことができ、やはり(75)に反する。従って(75)の仮定は正しい。

これを用いてkâna qad Pのqadの機能を分析できる。Hassan(1990)はこの複合形

の中のqadは強調を表す(128)と述べ、Bahloul(1994)はkâna qad Pはkâna Pに比べて話者の意図が表されている(169)とみている。筆者は複合形の中のqadは時制に関する機能を表すもので、強調など法的な機能は表さないと考える。確かにkâna qad Pは出来事の結果状態を表す点で、話者の視点を反映するかもしれないが、小説の情景描写に頻繁に使われているkâna qad Pに話者の意図は全く感じられない。また、kâna qad Pを否定した場合qadはその否定の範囲に入るので、「確実であることを述べる強調」の機能をもつといえない。

これを構成素の順序から示すことができる。Pは完了相・過去時制を表すAspect, Tenseの要素で、もしqadの機能を強調とするとqad=Mとなり、qad P全体はM-[T, A-LM]と表される。kânaは過去を示すTenseの要素なので、kâna qad P全体はT-M-[T, A-LM]の順序になり(75)に反する。qad Pを完了時制と仮定すると、qadはPと共に時制と相を表すのでqad Pは[T, A-LM]となる。これにkânaを付加するとT-[T, A-LM]という順序になるが、これは(75)に反しない。

8. まとめ

Pとその複合形qad P, kâna P, kâna qad Pに関する考察を簡単にまとめる。

- (1) 複合形は、その構成素が必ずModality-Tense-Aspect-Lexical Meaningの順に並ぶ。(§7) 複合形の意味は構成的(compositional)である。
- (2) 文レベルでは基本形と複合形は時間指示上重複しているようにみえるが、テクストレベルでは機能の対立が明らかである。
- (3) 主節でPは過去時制を示す。kânaが付加した形式は『前過去』に対応した、より古い出来事を、その生起した順に逆らって述べる場合に用いる。また、直示的な1・2人称によってPが現在完了に解釈されるおそれのある場合に用いて、『前過去』または『過去』の事象を表す。kâna Pは『前過去』の出来事を、kâna qad Pは『前過去』の出来事と『過去』における結果状態を表すので、kâna qad Pがkâna Pの代わりに用いられることが多い。(§3.1)
- (4) 関係節ではその形容詞的機能のため、Pは過去の特定時に起こった出来事(=時制に関与)を表すのではなく、完了相だけを表すことがある。この場合のPの時間的解釈は主節を基準にして行なう。また自由関係節はその内容を名詞に置きかえられる場合が多く、そのときは時制を表さない。時間副詞節などによって自由関係節の内容が過去の出来事であることが明らかな場合はkânaを付加する。(§3.2)
- (5) qad Pとkâna qad Pは共に過去の付帯状況描写の機能をもつ。kâna qad Pは、先行文より常に時間的に古い出来事の状態を表し、先行内容と関連性が弱い。qad Pは、先行文に時間的に先行・同時・後続の出来事を表し、先行内容と関連性が強い。(§4)

- (6) 文レベルではPもqad Pも共に「過去時制」「現在完了時制」を表す。(§5)
- qad Pが関係節や時間副詞節に現われないのは、qad Pがそれらと同じ意味・機能を表し、接続詞代わりに従属節を示す標識になっているからである。(§5.3.1)
- また 時間副詞節がidāfa(名詞の連続における後続名詞による先行名詞の修飾)構造に基づく場合、接続詞に導かれる節はその内容が動名詞に置きかえられるような、話者の判断を含まない出来事の陳述でなければならない。qad Pは出来事への話者の視点や判断を意味に含むので動名詞に置きかえできないため、この種の時間副詞節に現れない。(§5.3.2)
- (7) Hāl節と似た構造と機能から、qad Pがanna/inna節や主題-評言文に頻出することを説明できる。(§5.3.2) この説明の土台であるHāl節への頻出は、テキストレベルの機能「前提+視点の転換(関連性保持)」によって説明できる。(§6.2)
- (8) テキストレベルではPとqad Pの対立が明確になるが、Fore-/Backgroundの対立ではない。ForegroundのPは時間的に連続した出来事を表すが、Foregroundのqad Pには時間的連続性はなく、中心的出来事の最初のものだけを表す。qad Pは常に先行内容を必要とし、それに関連しながら視点を転換して新たな主題で事象を述べる。Backgroundのqad Pは付帯状況やコメント・結びを表すが、この場合も前提や関連性、視点の転換という特徴を保持している。「前提+視点の転換(関連性保持)」がqad Pのテキスト機能である。(§6.1) Pとqad Pの機能の違いはテキスト的なもので、qad PがPの意味を明示するというものではない。(§5.3.2)
- (9) 機能の適用される状況の範囲や説明の有効性から、「前提+視点の転換(関連性保持)」は「現在完了」、「emphatic mode」である。(§6.3)

[転写] (IPAの表記とは異なるもの)

[T] 歯茎無声閉鎖軟口蓋化音, [D] 歯茎有声閉鎖軟口蓋化音, [S] 歯茎無声摩擦軟口蓋化音, [Z] 歯茎有声摩擦軟口蓋化音, [x] 口蓋垂無声摩擦音, [G] 口蓋垂有声摩擦音, [H] 咽頭無声摩擦音, [ʔ] 咽頭有声摩擦音, [ʕ] 声門閉鎖音

[記号・略号]

φ: ゼロ, ゼロ形態の関係代名詞, a<b: aはbに時間的に先行する,

*: 非文法的, ^: 容認度が低い, °: 適格, -: 表記上の連続

単: 単数, 双: 双数, 複: 複数, 男: 男性, 女: 女性, 受: 受動態, 定: 定冠詞,

関代: 関係代名詞, 補: 補助動詞, P: "完了形", IP: "未完了形", s: 接続法, j: 希求法, E: Event, lit.: literally, N=Noun: 名詞, prep.=preposition: 前置詞,

RP=Relative Pronoun: 関係代名詞, S=Subject: 主語, Tadv.=Temporal adverb: 時間副詞

なお、例文の名詞は必要の無い限り格表示を省いてある。

付録1 動詞の基本形と複合形の体系

基本形	複 合 形		
	動詞/副詞 + 基本形	動詞+副詞/副詞+動詞 + 基本形	副詞+動詞+副詞 + 基本形
IP	kāna IP (過去未完了相) sa-IP (未来) qad IP (蓋然性・現在・未完了相)	sa-yakūnu IP (未来未完了相) kāna sa-IP (過去未来)	qad kāna sa-IP (強調・過去未来)
P	kāna P (過去完了相) qad P (現在完了) qad P (強調・過去・完了相)	sa-yakūnu P (未来完了相) kāna qad P (過去完了) yakūnu qad P (蓋然性・過去・完了相)	sa-yakūnu qad P (未来完了)

注) sa-の位置には sawfa も可能である。括弧内は理論的に合成された意味で、IP, Pの複合形の最下段は法性の意味を示す。また、yakūnu qad Pは、yakūnuがsa-と結合しない場合で、前に疑問詞を伴ったり、推量を表す語の後に続く接続詞anに導かれて接続法yakūnaとなつて、過去の可能性を表す。

註

1. 本稿で参照した先行研究は主に会話を扱ったものであるためか、文を越えたレベルの機能を談話機能と表現している。本稿の分析は書かれたものに基づくので、テキスト機能と呼んでいるが、特に厳密な区別はしない。
2. "口語"を話す者が、書き言葉的な"現代アラビア語"を正確に使えない、或いは喋れない場合がある。文法的正確さが学歴に比例することから、規範的・人工的で母語話者による内省の有効性や研究対象としての価値を疑問視するむきもあるが、筆者は次の点から研究対象としての価値を認める。①正確に使用できないのは、音韻・形態という言語固有の現象であることが多い。時制や相は一般的認知に関わるので、話者の内省が可能である度合いが高い。②本来規範的であったとしても日常で使われていくうちに変化が生ずる。現代アラビア語にはジャーナリズムの文体と呼ばれる"反規範的"な用法がある。
3. 個人差の問題を避けるために3人の20代の留学生に依頼した。エジプト人男性と女性各1名、サウジアラビア人男性1名である。筆者の些末な質問に対する親切と忍耐に感謝を表す。誤りがあれば、筆者の不十分な分析によるものである。
4. IPの完了相・未来的用法の現在時制の例を示す。近未来しか表せないのが未来時制ではない。

例 yarji?u ilā bilād-hi Gadan/*ba?da ?i?rin sana.

戻る3単男IP へへ 故郷 一後の 明日 後 20 年 (後は明日/20年後故郷へ戻ってくるだろう)

5. 完了(perfect)は事象の終わりとその事象を見る時間区間の始まりの間にgapがある構造をもつ。gapが極めて小さいとき、完了相との区別は曖昧になる。

完了相: ----- [--] (-:事象, []:事象を見る時間区間)

完了: ----+gap+ [] (Klein, W. 1994. Time in Language. p.109)

6. wa-lláhi "靴替って"などの誓いの言葉はqadと動詞の間に位置する。この場合だけqadの位置は動詞の直前にならない。

7. Bahloul (1994) はqadをATM categoryであると述べている(160)。(A=Aspect, T=Tense or Taxis (Relative Tense), M=Modality)

8. 『 』は時(Time)の区分を表すもので、特に時の区分ということを明示したい場合に用いている。「 」は時制または機能を表す。

9. 例えば、次の文の関係節は制限的にも非制限的にも解釈される。

例 ?inda-hu ibnân φ aSbaHâ Tabibayn.

~に 一彼 息子 双 関代 なる3双男P 医者に 双

制限的解釈: 彼には医者になった息子が二人いる。(医者以外の息子もいる。)

非制限的解釈: 彼には息子が二人いて、二人とも医者である。(息子は二人だけである。)

10. ただし例(21)のように、qad Pも主節と異なる主語をもつことは可能である。

11. 語彙アスペクトの違いによって現在完了の用法の解釈が異なる。到達点をもつ動的な動詞句で、その結果状態も意味に含むものは「結果」「近接過去」「経験」に、到達点をもつが結果状態を含まない動的な動詞句は「近接過去」「経験」に、到達点をもたない動的な動詞句、特に知覚動詞は「経験」に解釈される。

12. qad Pは後に明らかになるように、先行内容を必要とするので単文レベルではやや不自然である。強調の副詞laがqad Pにくみあわさったものは先行内容を必要としないので、単文では最も自然に響く。

13. NishioもDahl & Talmoudiも、強調の根拠は話者側に十分な証拠があることとしている。Nishioはqadを推量一般を表すepistemic modalに属するものとみなしている。しかし、強調する際に根拠に関与する度合いが強いので、筆者にはqad Pの機能はepistemological modalに属するとしたほうがよいと思われる。epistemological modalはexperimentalを表したり、心理動詞の補文に現れる。従ってqad Pが経験を表したり心理動詞の補文に類出するのは、このepistemological modalから説明できる。(cf. Chung, Sandra & Alan Timberlake 1985. "Tense, Aspect, and Mood." In Language Typology and Syntactic Description. Vol.3. p.244-46)

14. 否定疑問文にqadが用いられる場合、qadは聴者に命題の確実さを再確認するものなので「emphatic mode」の説明に反しない(Nishio 1988 337: 註24)。

例 a- laysa al-nabiy qad mâta ?

疑問詞 否定 定 一預言者が 死ぬ3単男P (預言者は死んだのではないのか?)

15. 形式の意味は語彙の意味に優越し、統語的な意味は形式の意味に優越する。前者の例は、例えば英語でstateの事象を表す語が進行形で現われて一時的な状態や

経過を表す。例 Today she is being beautiful.; I'm understanding you. 統語的な意味が形式の意味に優越する例は、過去時制形が伝達動詞の補文の位置で時制の一致により過去完了形になることが挙げられる。

16. 古い時代のアラビア語 (ancient Arabic) の関係節は、統語的な標識無しに被修飾の文の後に並置する構造で、機能の似たHál節と構造的に必ずしも違いがあったわけではない。文法規則が発達して限定の先行詞の場合に関係代名詞を用いるようになってから、両者の区別が意味上も明らかになってきた (Beeston 1970: 90)。

17. 接続詞anは主節の動詞が判断などを表す心理動詞の場合にも用いられるが、そのときは、an節にqad Pの形式が現れることが多い。

18. 筆者の集めたデータにはqad Pがテキスト冒頭に現れたものはなかった。インフォーマントのサウジアラビア人とエジプト人女性は qad Pがテキスト冒頭に現れないと述べた。ただし、エジプト人男性は出現する可能性があると答えたが、具体的な例は示さなかった。qad Pの強調の機能から考えても、疑いなど先立つ状況を必要とするので、qadがテキスト冒頭に現れないのは妥当性がある。ただし強調の副詞laを伴うla-qad Pは、前提を必要としない(本論例(27)と註12)のでテキスト冒頭にくる可能性がある。

19. 英語では、その現在完了の語用論的な機能を局面転換 (phase-change) と指摘した研究がある。(毛利可信 『英語の語用論』大修館書店 1980年 p. 220)

20. Bahloulは、qad Pが常に等位接続詞wa, faと共に現われると述べている(1994: 150)。先行内容との関連性がqad Pによるのではなく、これらの接続詞に基づく可能性があるが、実際のデータでは、意味上さほど関連が無くても接続詞waを用いたり(例1)、関連があってもqad Pだけで現われる(例2)ことがあるので、関連性はqad P自身の機能と考えられる。(次の例文中の” ”は段落区切りを示す)

例1 … 悪童たちを捜してきよろきよろしながら歩いた(P) …」 ああバイルートの冬ときたら! 雨は止むこと無く降り注ぎ(IP)、まるで神が天の扉を空けて(IP) 鏡を壊している(IP) かのようだ!」 小屋に戻る時刻は過ぎた(wa qad P) … (A: 24)

例2 … 我々は先祖の後を辿っているのだろうか。それともその足跡から離れているのだろうか。かつて我々に対して言われていたことは今も当てはまるだろうか(IP)。」 我々は優雅な言い回しを愛する(qad P)が、先祖は偉大な行いや行為の謙実さを愛した(P) … (M1: 90)

21. 別のlaw節のqad Pの例も全く同じである。

例 wa- ~~wa~~ qad fa?ala yawman min al-ayyâm, la-kânat li-l-Sabiy qiSSa

そしてもし する3単男P 日に ~から 定-日 複 強調 ~である3単女P ~に-定-少年 物語は

ka- qiSSa-hi ma?a sûra al-ÿu?arâ' aw saba'a....

~のような一物語 -彼の ~と共に 章 定-詩人の 複 或いは サバアの

([ある本を学んでいた少年が勉強しなくなる] (父は息子に暗記したことを言わせて安心し、息子が自分を欺いているのに気付かなかった。一度でもその本を開いて、息子が暗唱しているのと比べなかったのは不思議である。) もしある日彼がそうしたら、コーランの詩人たちの章やサバアの章のようなことが少年に起こったろう。AY: 76-77)

前提=先行テキスト:父は安心してしまい、息子の暗唱を本と比べない

視点の転換=law節のqad P:父が本を開けて息子の暗唱と比べる

22. 英語では現在完了がニュースのヘッドラインに使用され 最近の重要な出来事を表す(Schwenter(1994) "'Hot News' and the Grammaticalization of 'Perfect'." *Linguistics* 32. 995-1028.)。口語ドイツ語では、現在完了は時間的に不連続的な節で使用され、語りの最初のアブストラクトや一連の出来事の最初に用いる(Santorini(1985). Myhill John. 1992. *Typological Discourse Analysis*. による)。

23. qadが1つの節で2度現れる可能性のある他の場合は、複合形qad yakūnu qad P (過去の事象に対する推量)である。この場合も必ず現れるのは前のqadである。

例1 wa- qad yakūnu hāḏā al-ism qad ustubdila bi-Gayr-hi.

そして 補3単男IP これは 定 一名前は 変える3単男P受 ~k-以外 -それ

(この名は別ものに変えられたかもしれない, CA:6)

例2 fa- qad yakūnu al-burkân Ḥāra min jadid.

だから 補3単男IP 定 -火山が 噴火する3単男P ~から 新しい (火山が新たに噴火したのかもしれない, CA:14)

24. Comrieは動詞複合形内の構成素の順を Tense-Mood-Aspect-Lexical Verbとしており、筆者の仮定した順序とではTenseとMood/Modalityが逆である。Comrieは未来を表すsa-yakūnuを時制とは考えずMoodであるとし、他言語(英語やギヤナクレオールなど)にもあてはまる順序にまとめている("On the Importance of Arabic for General Linguistic Theory." In *Perspectives on Arabic Linguistics*. Vol. 3. 1986. p. 12)が、筆者は未来を時制と考えているため上に述べたような違いが生じる。ModalityをTenseの前にすることで、本稿で示すようにkāna qad Pの中のqadが強調を表さないことや、補助動詞kānaの前の、テキスト的な機能を示すqad(cf. 例(73))を、話者の態度を表すものとしてModalityに含めて扱うことができる。

参考文献

- Bahloul, Maher. 1994. *The Syntax and Semantics of Taxis, Aspect, Tense and Modality in Standard Arabic*. Diss. Cornell University: UMI, 1994. AAC 9427887.
- Beeston, A. F. L. 1970. *The Arabic Language Today*. London: Hutchinson, University Library.
- Bloch, Ariel A. 1986. *Studies in Arabic Syntax and Semantics*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Cantarino, Vicente. 1974. *Syntax of Modern Arabic Prose*. 3vols. Bloomington: Indiana University Press.
- Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge UP.

- , 1985. Tense. Cambridge: Cambridge UP.
- Dahl, Östen & Fathi Talmoudi. 1979. "Qad and Laqad - Tense/Aspect and Pragmatics in Arabic." Aspectology: Workshop at the Fifth Scandinavian Conference of Linguistics Frostavallen, April 27-29
Ed. Thore Petterson. 51-68. Stockholm: Almqvist Wiksell International
- Fleischman, Suzanne. 1985. "Discourse Functions of Tense-Aspect Oppositions in Narrative: Toward a Theory of Grounding." Linguistics 23. 851-82
- Givón, Talmy. 1984. Syntax: A Functional-Typological Introduction. Vol. 1. Amsterdam: John Benjamins.
- , 1990. Syntax: A Functional-Typological Introduction. Vol. 2. Amsterdam: John Benjamins.
- Hassan, M.H. 1990. A Contrastive Study of Tense and Aspect in English and Arabic with Special Reference to Translation. Diss. The University of Bath: UMI, 1991. AAC DX90618.
- Holes, Clive. 1994. Modern Arabic: Structures, Functions, and Varieties. London: Longman.
- Li, Charles N., Sandra A. Thompson, and R. McMillan Thompson. 1982. "The Discourse Motivation for the Perfect Aspect: The Mandarin Particle LE." Tense-Aspect: Between Semantics and Pragmatics.
Ed. Paul J. Hopper. 19-44. Amsterdam: John Benjamins.
- McCarus, Ernest N. 1976. "A Semantic Analysis of Arabic Verbs." Michigan Oriental Studies in Honor of George G. Cameron. Ed. Louis L. Orlin. 3-28. USA: Dep. of Near Eastern Studies.
- Nishio, Tetsuo. 1988. "On the Modal Function of the Arabic Particle Qad: A Contribution to the Typology of Modality." 『アジアの諸言語と一般言語学』 313-40. 三省堂.
- Wright, W. 1896-98. A Grammar of the Arabic Language. 3rd ed. 2vols. Cambridge: CUP.

例文の出典 (略号=出典(著者, 頁数, 出版年))

[小説]

A=al-aʔraj(tawfiq ʔawwád, p.19, 1971)

AY=al-ayyám(Taha Husayn, p.152, 1958)

B=bidáya wa niháya(Nagib MaHfúz, p.373, 1985)

CA=Contemporary Arabic Readers(p. 93, n. d.)
 H=Hayâti(aHmad amin, p. 150まで, 1959)
 HM=Hârib min al-mawt(?abd al-?ajili, p. 19, 1974)
 J=jarima fi qiTâr al-?arq(Christie, p. 207, n. d.)
 M=al-muTâla?a, al-?arabiyya (Vol. 1 p. 220, Vol 2 p. 133, Vol 3 p. 122, 1940)
 MT=al-mu?tazila(Taha Husayn, p. 17, 1971)
 MW=mâ warâ'a al-nahr(Taha Husayn, p. 111, 1986)
 Q=qiSSa lam tatimma(muHammad ?abd allâh, p. 203, 1970)
 QM=qiSSa al-madinatayn(Dickens, p. 477, 1982)
 R=al-rajul al-GâmiD(Christie, p. 176, n. d.)
 S=Syntax of Modern Arabic Prose(Cantarino, 3vols., 1974)
 [歴史記述]
 I=イラク百科事典
 K=kitâb al-tuHfa al-mulûkiya al-dawla al-turkiya (?abd al-Hamid Hamdân,
 p. 241, 1987)
 T=fi târix al-yaman(?abd allâh al-Hib?i, p. 367, 1986)
 [ニュース]
 W=al-wasT No. 44(p. 88, 1992)

(こんどう ともこ、博士後期課程1年)

On functional differences between 'Perfect' and compound 'Perfect'

KONDO Tomoko

Summary

In Modern Standard Arabic, there are four forms which indicate past tense and perfective aspect—*P*(erfect), *qad P*, *kâna P* and *kâna qad P*. *kâna* is an auxiliary verb which refers to the past, and *qad* expresses emphasis or approximation of the past to the present. The compounding elements are used repeatedly in the order of [Modality-Tense-Aspect-Lexical Meaning]. Although overlap of meanings and of functions is found between these four forms on a clause level, their functional differences appear explicit on a text level. *kâna P* depicts before-past events, while *kâna qad P* refers to resultant states in the past as well as before-past events. To add *kâna* makes the compounds refer to before-past or past events more clearly than *P* does: they are used for events which are not presented in the same order as they occur in reality, or for preventing *P* of 1st or 2nd person from being interpreted not as past tense, but as present perfect, because of the deictic meaning of the person. In relative clauses, *kâna* is added under another condition. When a relative clause functions more restrictively, the *P* in the clause has only the aspectual meaning, and past tense should be expressed by adding *kâna*. As for *P* and *qad P*, both of them refer to past tense as well as present perfect tense in a clause, though *qad P* seems to express present perfect more clearly by itself than *P* does. However, the function of *qad* is not clarifying one, and it is concerned with textual functions. In texts, *P* depicts events sequentially, while *qad P* counter-sequentially, and the latter always needs presupposition, turns a previous viewpoint to another, and submits a new, but relevant topic to the presupposition. The change of a viewpoint is expressed formally, for example, by a conjunction *fa*, or by a new paragraph, or by fixed constructions like *Hâl* and *inna/anna* clauses. This textual function includes the function of emphasis and present perfect. The distribution of *qad P* in clauses is biased, and the frequency in *Hâl* or topic-comment constructions is concerned with the textual function. As for the rare appearance in relative and time adverbial clauses, it is associated with grammatical constraints on a clause level, and *qad* functions as a subordinating marker.